

新たななる覚悟

令和五年七月法話 薬師寺管主 加藤朝胤

一 布施波羅蜜（ふせはらみつ）

さまざまな施しをさせて頂く修行のこと

貪欲（とんよく）の心を捨て、人に財を与え、法（真理）を教え、安心を与えること

○ 法 施（ほつせ）

お釈迦様の真理（教え）を説き、迷い悩む人を救い、悟りの世界へと導くこと

出家者たる僧侶は、法施の実践が本来の役目

佛教を学ぶ在家者も、縁ある人にお釈迦様の教えを伝えることが布施

人に物事の道理を説くこと

金銭や物品がなくても、こだわりや囚われから離れ真理（法）を教え導く

誰にでも法施はできる

他人の話聞いてあげる行為も法施 自分にできる布施を実行して、人の役に立つこと

○ 財 施（ざいせ） 大智度論

金銭や物品を他人に施す物質的な布施のこと

布施は、自分の出来るだけの気持ちを喜んでさせて頂くこと 喜捨（きしゃ）

喜捨は喜んで施す 喜んでさせて頂きますという心がけの大切さ

○ 無畏施（むいせ）

人の悩みや恐れを取り除き安心を与えること

無財七施 捨身施 慈眼施 和顔施 愛語施 心慮施 床座施 房舎施

二 持戒波羅蜜（じかいはらみつ）

戒律を守ること

戒（いましめ）によって悪業の心を捨て、心の迷いを去り、身心を清浄にすること

律はこれらの教えを守り、身を慎むこと

自分はまだ完成していない人間だからとても人を助け導くことはできないという考えを持たない

自分だけの生活に囚われてしまうと、自己の完成はできない

人のために尽くすことによって自分も向上し、自分が向上することによって人にも尽くすことができる

三 忍辱波羅蜜（にんにくはらみつ）

瞋恚（しんに）の心を起こさず、迫害困苦や侮辱等を忍受すること

忍辱というのは寛容ということ

人に対してだけでなく、忍辱の修行を積むことによって、天地のあらゆる事象に対して、腹を立てたり、恨んだりすることがなくなる

暑ければ寒い方が良いといい、寒ければ暑い方が良いといい、太れば痩せたいといい、瘦

せれば太りたいという

忙しすぎれば暇になりたいといい、暇になれば忙しい方が良いという

人間は愚痴をいい、不平・不満をいう人が多い

お釈迦様の教えを生活に生かして修行を積む人は、心がゆったりとして調和しているので、四季折々の変化にも常に感謝して賛嘆できるようになる

周囲の変化に心がとらわれないようになる

無理なことをしてくる相手は、世間の道理を知らない（佛の教えである真理を知らない）
忍辱という精神的習慣が人々の心に浸透できたら、世の中も平和になる

四 精進波羅蜜（しようじんはらみつ）

懈怠（けたい）の心を取り除き、身心を精励して、他の五波羅蜜を修行すること

精は「まじりけのない」という意味で、目標に向かって一筋に進んでいくこと

一所懸命に一念心で事に当たっても、結果が得られない場合や逆の現象が出たり、外部から水をさされたりすることがあっても、大海の表面に立つさざ波のようなもので、やがて風がやめば消えてしまう

多少の困難は自分を試す幻に過ぎない

五 禅定波羅蜜（ぜんじょうはらみつ）

心の動揺・散乱をなくし、心を集中し安定させ、真理を思惟（しゆ）すること

禅とは「静かな心」「不動の心」

定とは心が落ち着いて動揺しない状態

一所懸命に精進するばかりではなく、静かな落ち着いた心で物事の本当の姿を見極める力が智慧 この智慧がなければ、人を救うことはできない

六 智慧波羅蜜（ちえはらみつ）

一切の諸法に通達して、**愚痴（ぐち）**の心をなくし、迷いを断ち、真理を悟ること、または諸法の究極的な実相を見極めること

苦・集・滅・道の真理からなる四諦・八正道・十二因縁の教えにより、苦しみの根本を知り、考え方や事象のありのままを認識することが大切

不幸の原因は、自分の心の中にある無明（むみょう）であり、智慧がなく世の中の道理に暗い状態を意味している

自分に不幸が降りかかると、その原因を自分以外のものに責任転嫁しようと試みる

佛教の目的の一つは、苦からの離脱である

この不幸の原因を明らかにし、納得した解答が得られて、はじめて人は安心の境地を得ることが出来る

佛道修行を通じ、我執を取り除き、慈悲の心で自分と他人の対立・区別を無くし、自他一致の心持ちで行動する人を菩薩と呼ぶ